

長安春望

盧

綸

東風雨を吹きて青山を過ぐ

却て千門を望むば草色閑なり

家は夢中に在りて何れの日か到らん

春江上来りて幾人か還る

川原繚繞たり浮雲の外

宮闕参差たり落照の間

誰か念わん儒と為りて世難に逢い

独り衰髪を將りて秦関に客を念は

【作者】 盧 綸（七四二〜八〇〇？）中唐の詩人。字は允言（いんげん）。山西省永濟県の人。安祿山の乱をさけて陽（はよう）に移り、何度も進士（高等文官）の試験を受けたが失敗した。その後宰相の元載（げんさい）にその才能を認められ、河南首関（しゅみん）郷の尉（軍事・警察を司る）となり、昇進して監察御史（官僚の功罪を監察する官）となったが、病気のため辞職して故郷に帰った。「盧戸部（ろこふ）詩集」十卷がある。

【語釈】 *東 風…春風。 *千 門…宮城の多くの門。 *繚 繞…めぐりめぐる。くねくねと曲っている形容。 *宮 闕…宮殿。 *参 差…高く低くふぞろい。 *落 照…夕日の光。 *世 難…世の中の騒乱。 *衰 鬢…薄くなった鬢の毛。 *秦 関…関中。ここでは長安をさす。

【通釈】 春風が雨を吹きおくりつつ青い山なみを過ぎてゆく。ふりかえって、数多い宮城の門の方角をみわたせば茂った若草の色はのどかである。故郷の家は、夢に見るばかりでいつになったら帰ることができようか。春はいま川のほとりにやって来たが故郷に帰れる人は幾人あるだろう。

川ぞいの原野はくねくねと浮き雲のなたまで続き、宮殿は高くあるいは低く夕日の光をあびて輝いている。ああ、儒者としてこの乱世にめぐりあわせ、髪の毛も薄くなった老いの身で、たったひとり秦関に旅暮らししようとは、いったい誰が思ったことだろう。

【備考】 この詩は、長安の春景色を眺めながら、自分の不遇を悲しんで作る。一説に大暦初年、科挙に落第しつづけた頃の作といわれるが、大暦初年は30歳位で衰鬢には当たらないので、もつと後の作であろうと思われる。「唐詩選」に所収されている。